

平成27年度スーパーグローバルハイスクール構想調書の概要

指定期間	ふりがな	あおやまがくいんこうとうぶ				②所在都道府県	① 東京都
27～31	① 学校名	青山学院高等部					
③対象学科名	④対象とする生徒数					⑤学校全体の規模	
	1年	2年	3年	4年	計	全日制普通科高校。1学年約410人。全体で1230人。男女比はほぼ同数だが、女子が3～4%上回る。	
普通科	417	403	406		1226		
⑥研究開発構想名	多様性の受容を基盤とした「サーバントマインド」を持つグローバル・リーダー育成						
⑦研究開発の概要	<ul style="list-style-type: none"> ・海外提携校と共同で多様性の受容、貧困格差等の問題に対し、設定した課題を研究する。 ・2020年東京オリンピック・パラリンピックに対応できる、高度な英語力と深い文化への理解、他に資する精神に富む、東京アテンド・ボランティアリーダーを育成する。 ・高大連携の枠組みを用い、世界各地から集まる留学生との多言語セッション、フォーラムを通し、大学在学中に世界各地に長期留学を行う人材を育てる。 						
⑧研究開発の内容等	⑧-1全体	<p>(1) 目的・目標</p> <ul style="list-style-type: none"> ・異なる文化社会的背景を擁する同世代と積極的に意思疎通を行い、多様性を当然のことと考え、お互いの長所を認識しながら発信受信できる生徒を育てる。 ・また、共に形成した集団が問題を認識しそれを共有して、解決までのプロセスを進む際のリーダーシップを取れる人材を育成していく。 ・高大連携を一層強化し、大学在学時に協定を結ぶ世界各地の大学への留学生数を現在の年間50名（半数は短期留学）を80名に押し上げることを目指す。 <p>(2) 現状の分析と研究開発の仮説</p> <ol style="list-style-type: none"> 1. 短期交換留学のパートナーとして海外3校と姉妹校提携を結んでいる。それぞれの学校と共同で取り組むプロジェクトを用意することで、思考や取り組み過程に多様性を見出し、積極的に受容する姿勢が生み出される。この中には2020年に開催される東京オリンピック・パラリンピックの際、ボランティアガイドを取りまとめることができるリーダーの育成も含まれている。イートン校との交流の際に、2年にわたり行った実績を持つこのプログラムを他の2校との交流にも用いることで、より多くの生徒が関わることができるようにする。 2. 学院全体で取り組んでいるフィリピン訪問プログラムや震災の被災地にある宮古高校との交流を通して、「共にいる」ことから育む同朋意識を基に、社会の歪みや災害の問題を共に考える機会を提供してきた。今後はこの活動に生徒の自主団体が接点を持つことで、さらなる活動の広がりが期待できる。 3. 高大連携に関しては、教授陣の本校生徒への学問入門講座の開講、大学への留学生をリーダーとする会話セッション、チャットルームの開催などですでに実績がある。さらに国際政治経済学部や地球社会共生学部のスタッフがアドバイザーとして国際化、グローバル化の視点からそれぞれシンポジウムへの招待や、アジア諸国からの留学生との共同フォーラムの定期開催でさらにつながりを強めていく。これにより欧米はもちろん、それ以外の地域への関心が高まり、世界各地に留学する学生が増えることが期待される。 <p>(3) 成果の普及</p> <p>学院全体の定期刊行誌「青山学報」、本校教員の「研究紀要」、月報「高等部だより」で紹介していく。また、日々の礼拝を通しての体験の共有や文化祭での展示発表という形で行っていく。隔年、大学協定校からの留学生、本校卒業生を中心とした発表フォーラムを行う。</p>					

<p>⑧ -2 課 題 研 究</p>	<p>(1) 課題研究内容 課題研究テーマ：①多様性の受容 ②社会的弱者に対する認識の拡充と関係の構築 1. 日英合同の高校生によるグローバル問題の認識と共有。多様性を受容することの重要さの認識と共有。「フェアトレード」問題共同討議の取り組み。その運営法と成果の検討。 2. 東京アテンド・ボランティアとそれを取りまとめるリーダーの育成の方策。 3. 「フィリピン訪問プログラム」震災被災地の高校、県立宮古高校、宮古来たとの交流プログラムによる「他者に寄り添う心」の育成の過程とその検討。 4. 高大連携による世界各地から青学大への留学生との出会いが、大学に進学したのち協定する大学へ留学する生徒の人数にどのような影響を及ぼすかを調査。</p> <p>(2) 実施方法 1. 初年度、アジア諸国の留学生と討論形式のキャンプを開催する。2年目、提携校・英国リーススクール生10名、本校生20名が郊外施設で宿泊しながらグローバル問題の討議を行い、生徒の自主団体「ブルーベコ」の協力も得ながら、3年目には共同で「フェアトレード」の現地調査、研究発表を行う。 2. 海外提携校からの短期訪問を受けた際、1校の訪問につき30名の都内アテンドチームを作る。そのチームに対して英語科ネイティブ教員がアテンド係養成セッションを組む。 3. 「フィリピン訪問プログラム」に参加する初等部から短大までの年齢の違う参加者がお互いにどのような影響を与え合うかを検証する。宮古高校とのつながりを継続し、参加者中心のフォーラムを開催して、双方向の学び合いの場を作る。 4. 大学への留学生の開く多言語会話セッションとアジア諸国の学生とITを使って行うフォーラムを定期的実施する。5年後には大学の協定校長期留学に参加する人数を現在の倍の50名に押し上げる。(地域も米英外に押し広げる。)都心に位置する土地の利を活用した「大使館レクチャーシリーズ」を大学国際交流センターの全面的な支援により実施する。</p> <p>検証評価 1に関しては活動記録を機関紙として発行。2,3に関してはSGHプログラム専用のポータルで行う、定期的に意識調査を回収・集計する。1,2,3を通しての生徒の成長過程のサマリーは個人がポータルの「平和共生ログブックのページ」を完成し提出した際に評価を行う。4については大学国際交流センターから報告される留学者数で検証を行う。</p>
<p>⑧ -3 上 記 以 外</p>	<p>(1) 課題研究以外の研究開発の内容・実施方法・検証評価 * 青山学院英語教育センターが独自に開発した初等部から高等部まで使用する一貫制英語テキスト“Seed Book Series”12巻ではぐくむ英語運用能力:検証は各学年開始時に実施するTOEICを用いる。(1年はTOEIC Bridge) * 海外初心者に国際社会参加を促す本校のカナダホームステイ:検証は、SGHポータルへの生徒のフィードバック、実施後の感想文、その後留学に取り組む生徒、卒業生の人数調査に基づいて行う。</p> <p>(2) 課題研究の実施以外で必要となる教育課程の特例等 なし</p> <p>(3) グローバル・リーダー育成に関する環境整備, 教育課程課外の実施内容・実施方法 * ICT委員会による電子黒板、タブレット端末等ITツールを駆使した授業。生徒のアイデアを生かす発信型、双方向の授業展開の導入で、知識の定着と思考力の向上を目指す。 * 生徒個人に配布する青学SGHポータルを通し、イベントの告知、参加申し込み、資料配布、意見交換、フィードバックから、リーダーシップ、サーバントマインドの成長を追跡する意識調査までを速やかに行えるようにする。</p>
<p>⑨その他 特記事項</p>	<p>* 幼稚園から大学院までをワン・キャンパスに擁する環境を最大限に利用する。初等部、中等部との連携。高大7年スパンの中で、自分の目的や成長に合った時期に長期留学ができるよう、アドヴァイスするシステムを強化する。 * 国際政治経済学部、地球社会共生学部の教授陣より、高校生個人々々人に向けての適切なアドヴァイスを得られるシステムをSGHポータルに組み入れていく。</p>